

第四十六回評論 隨筆賞

評論部門 「駅」と短歌―集團を求める孤独と集團の中の孤独―

大阪 磯川朋美

磯川朋美の評論について

東京（新橋）と横浜（桜木町）の間に日本最初の鉄道が開通したのが明治五年、新橋と神戸間の東海道本線が全通したのが明治も半ばの二十二年と知る時、鉄道と近代短歌とは深いつながりがあるのだと思いが当たる。そして鉄道には欠かせない駅がどのように詠まれてきたかについて、作者は考察を進めてゆく。

上野駅のホームに歌碑のある啄木の「ふるさとの訛なつかし」の一首を引いた作者は、そこに都会ならではの雑踏の騒音を聞き取る。そんな中に「ふるさとの訛」を聴こうとした啄木を強くとらえていたのは〈孤独〉である。今回の「駅」と短歌」のサブタイトルが「集團を求める孤独と集團の中の孤独」とされているゆえんである。

一方で近代の短歌では駅や鉄道が労働と深く結びついていると、作者は指摘する。引用した上田三四二の歌のように鉄道の現場で働く人たちはもちろんのこと、乗客たちもまた通勤の重要な手段として鉄道

を利用していった。近代国家の建設あるいは太平洋戦争後の国土の復興などに邁進していた時代は、国民はしやにむに働き集團に加わることを良しとして生きてきた。ここでは孤独から逃れ、集團の一員となることが求められていた。

駅を労働の象徴としても詠んできた近代短歌だが、やがて変化が生じてくる。それを作者は小中英之の代表作「蛭田てふ駅に降りたち一分の間にみたざる虹とあひたり」に見ている。静謐なたたずまいの小駅に小中が見たものは、「大きな時の流れ」だと作者は言い、「この頃から駅という語は人生的、精神的な意味合いを持って詠われる」ようになるが続ける。以下多様な現代歌人たちの様々な角度から見た駅の歌が挙げられてゆく。彼らにとつて「老若男女が集えども止まらず深く交わりもしない駅」とは、もはや啄木が覚えた孤独を実感する場ではなく、孤独な自分を見つめる地点として認識されるに至る。そして作者は結論付ける、「駅という存在は、川や風など流れることによつて人生に重ねられる言葉と同様の捉え方」をされていると。

ここで思い当たるのは、作者は本論に入る前に十六行を費やして、駅名だけを連ねたのみで作り手の思いを込めない現代短歌を取り上げていることである。それは本論展開のアンチテーゼとも映るがそうではあるまい。韻律の魅力だけで一首が成り立つのは短歌形式のもつ大きな力であり、それは古典和歌以来の伝統でもある。そして「川や風」が和歌の格好の題材であったの言うまでもない。近現代の短歌

を論じつつ、作者は古典和歌に底流するものを探り当てている。短歌に関する評論というと、特定の歌人個人についてのものが多い。もちろんそれは大切なことだが、ともすると狭い世界に入ってしまうがちだ。そうした中で今回の評論は時間的にも空間的にも豊かな視座を獲得している。スペースの制限からやや駆け足になった所もなくはないが、十分に説得力があるのが頼もしい。今後が楽しみだ。



磯川朋美

感想

一人として同じ人生を歩まない人間が集まって作る社会は、とても面白い。社会から短歌は離れてはいけない。そんな思いで書きました。発表の場を与えて下さった同人の皆様、とりわけ未熟な私に日々学びの場を与えて下さる大阪支部、COCOONの会の皆様に、心より感謝申し上げます。

略歴

一九七八年 埼玉県秩父郡生まれ
二〇一四年 コスモス短歌会入会
二〇二一年 COCOONの会参加

《選考過程》

選者団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・小島ゆ・木畑・大松・田宮・津金・福士・藤野・風間・田中・橘・水上比・鈴木竹・原賀・水上美・大野の各氏から回答があった。島な・小田部・斉藤の各氏から回答があった。被推薦者は評論部門五篇、随筆部門十篇であった。

推薦の内訳（一人1点）は、評論部門が磯川朋美「駅」と短歌―集団を求める孤独と集

団の中の孤独― 11点、中村敬子「さらさら星とてまり唄―介護のなかにある詩―」3点、齋藤美衣「狩野一男の生の深淵―ユーモアから広がる世界―」3点、森田治生「コスモス」に依った歌人たち」3点、前中映「若い人たちの歌」1点であった。
随筆部門は、丸山克介「奄美群島日本復帰の父」4点、田中泉「九歳の私」4点、清水佑太郎「韻文っていいな」2点、高橋梨穂子「トリップとジャーニー」1点、人見江一

「遺跡めぐりに参加して」1点、森田則子「Mystery seedの正体」1点、田中幸子「伸一ちゃんのお三輪車」1点、武田弘之「創刊70周年からの出発」1点、佐々木佳子「恐竜展」大空をめざした恐竜」1点、田中愛子「日本語こぼれ話」1点であった。これを二月十七日、編集部で検討した結果、評論部門は磯川朋美の受賞が決まり、随筆部門は受賞作無しとなった。